

本音インタビュー

映画監督

金 聖雄氏

袴田巖さんの 記録映画制作

静岡市清水区で1966年、一家4人が殺害された事件で死刑判決が確定後、2014年に静岡地裁で再審開始決定を受け釈放された袴田巖さん(80)は、故郷の浜松市内で姉の秀子さん(83)と暮らしている。2人の日常をドキュメンタリー映画「袴田巖 夢の間の世の中」に描き、失われた時間の重さとはげない日々の尊さを伝える。

「説明は少ない一方、挿入される袴田さんの獄中書簡や月の映像が印象的。」「巖さんの存在や文章、



キムソンウン 前作「SAYAMA みえない手錠をはずすまで」で毎日映画コンクールドキュメンタリー映画賞。大阪府出身。東京都在住。52歳。

失われた時間 想像して

秀子さんの姿を見て、鑑賞者がどう受け止めるかを大事にしたかった。言い切るのではなく、見る人が想像したり映像に入り込んだりできるように。見ようとなければ見えてこないことのモチーフとして昼の月を用いた。満ちていく月を意識的に収めたが、巖さんの人生が満ちていってほしい」という私自身の願いだ」

「秀子さんも主人公。」「一喜一憂することなく明るく前向きに笑い飛ばす秀子さんは、見る人にとって救い。どんな精神科医よりも巖さんのことを分かっている、やりたいことをやらせてあげている。『私は私の人生を生きる』という姿勢がかっこよく、秀子さんがいなければ映画にしていなかったかもしれない。ただ編集過程では、巖さんより存在感が勝ってしまったのではないギリギリのバランスを取るのが難しかった」

「『普遍性』を盛り込むことにもこだわった。」「映画の中に普遍的なことがないと、見る人は共感できない。あんなパンをほお張ったり、うたた寝をしたりすることが、実はどれだけありがたいことか。映画に普遍性があればあるほど自分とつながって見ることができる。自分とリンクしないと思罪(えんざい)に興味を持ってないし、想像もできない。秀子さんが健康体を操をしている場面があるが『死んでたまるか』という思いの裏返しではないか。秀子さんのユーモラスな体操を笑った後で、その意味を考えてもらえれば」

「ドキュメンタリー映画を取り巻く国内の状況は。」「商業映画との間に見えない境界線があるのが現状で、映画全体の中では小さな枠。商売として成立しにくいから劇場も少なく、なかなか足を運んでももらえない。それでも今回(インタビュー)ネット上で資金を募る(クラウドファンディング)で約900の個人・団体が応援してくれた。ドキュメンタリーと商業映画のどちらが良い悪いではなく、同じ土俵で評価してもらえないような仕掛けが必要と思う」

(聞き手) 社会部・佐藤章弘